

今号だからこそ「ラグビー考」

翁島小学校長 永島慶和

あれほど熱狂の渦に巻き込まれるとは……。数十年前の競技経験者の立場で物申すならば、意外な現象でした。

学級担任時代。勝手に「ラグビー組織論」と銘打ち、ラグビーをとおして学んだ経験を、自らの学級経営に反映させていました。今回は、当時を思い出しながら、その一部を紹介いたします。

1 適材適所のポジションがある。

ラグビーは、集団競技の中で一番人数が多い、15名でプレーをします。昔から「誰もができる」「その人に合ったポジションが用意されている」等と言われていました。言葉は悪いですが、「のっぽ・ちびっこ・ふとっちょ・やせっぽち」が活躍できるスポーツなのです。のっぽは、ジャンプ一番、高いボールをしっかりとつかみます。ちびっこの出すパスは自由自在で、チャンスをたくさん生み出します。ふとっちょは力自慢。味方が確保したボールを持って突進します。やせっぽちはその脚力を生かして、トライに結びつけます。

【誰もが、この学級には必要なメンバーだ。個性を生かそう。】
【目的を共有して、自分ができる役割をしっかりと果たそう。】

2 瞬時の判断力が問われる。

練習中はガンガン熱い指導をする監督やコーチですが、試合中は観客席で見守っています。つまり、試合中の指示は出さないという不思議なオーラが漂う競技です（笑）作戦等は事前に確認しますが、その状況下の判断は選手個人に委ねられます。ある意味、指導者から信頼されているんですよね。グラウンドに出ている選手は、キャプテンを中心にまとまります。味方のある動きを察知して、自分も動く。自分が倒されそうになって横を見たら、そこにあいつがいた！等、互いのアイコンタクトで救われた場面が数多くありました。

【善悪の見極めと、状況に応じた判断力に磨きをかけよう。】
【適切な判断による自己表現力（パフォーマンス）を高めよう。】

3 楕円形の動き（運命）を引き寄せる。

あの楕円形のボールは、人生のようにたとえられていました。その動きには、正直、悩まされました。どちらに転ぶかわかりませんからね。気まぐれな動きが勝敗を分けることもあります。ところが、ですよ。敵陣めがけて高く蹴り上げたボールを、必死になってあきらめずに追いかけると、不思議なことに、バウンドが変わって、容易に自分の腕の中にすっぽりと収まることがあるんです。何事も努力を続けることが大事だと実感しました。運命が味方をしてくれるんですよ。

【自分の手で、運命を切り拓こう。】
【あきらめないで夢を続けると、必ず叶う。】

この文章を執筆しながら、当時の「熱い」（「暑苦しい」とも表現できる）自分にタイムスリップしていることに気がきました（笑）

自分の個性を発揮できる、居場所がある。
その場に応じた適切な判断力で、自己表現ができる。
自分の目標に向かい、真摯に努力をし続ける。

そのような子どもたちの姿を、力強く後押しできる学校でありたいと思います。